

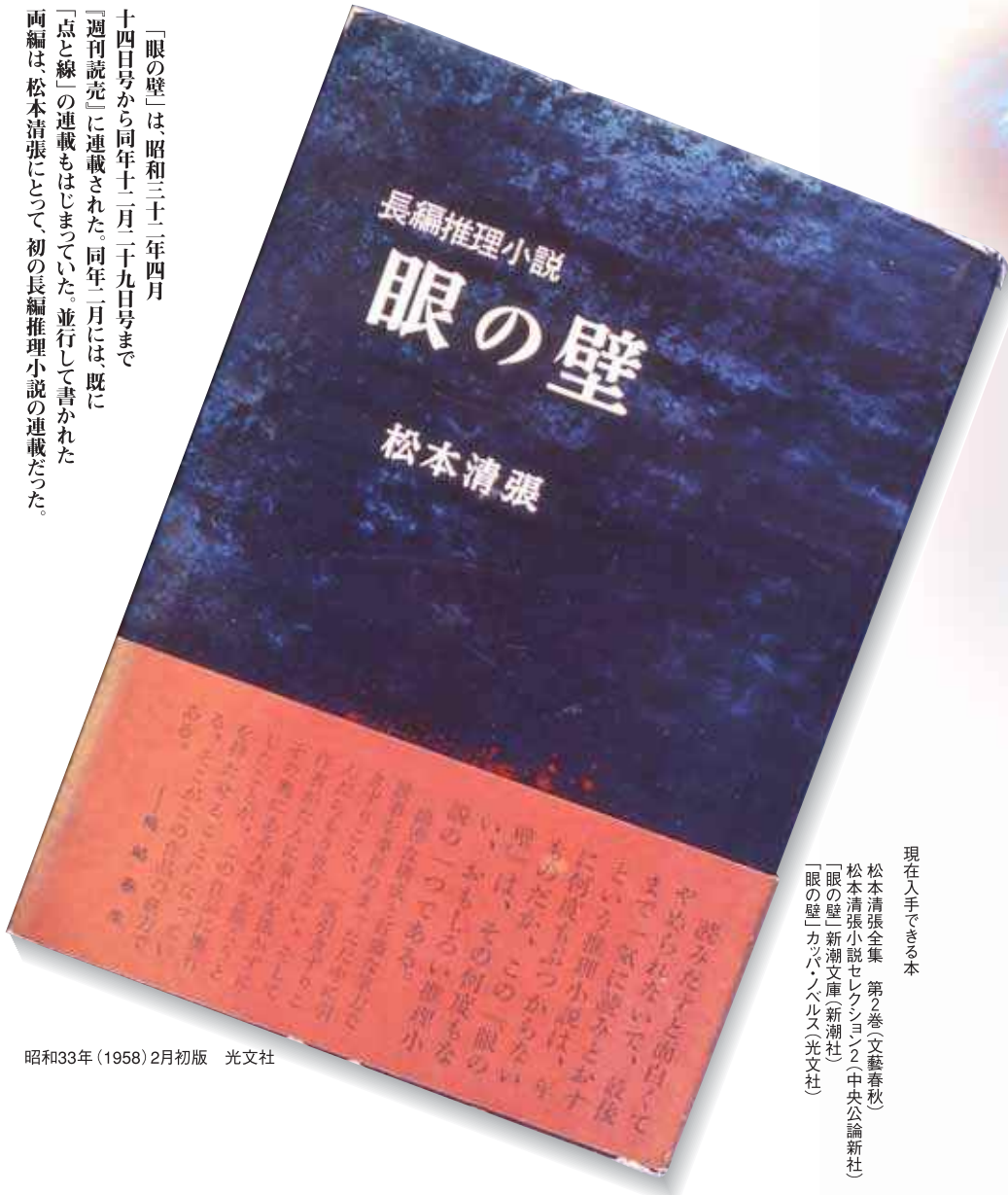
松本清張記念館

◆館報◆

2000.12

第5号

眼は、それを遮蔽した壁を 眺めているにすぎない。



「眼の壁」は昭和三十三年四月十四日号から同年十二月二十九日号まで「週刊読売」に連載された。同年二月には、既に「点と線」の連載もはじまっていた。並行して書かれた両編は、松本清張にとつて、初の長編推理小説の連載だった。

昭和33年(1958)2月初版 光文社

現在入手できる本

松本清張全集 第2巻(文藝春秋)
松本清張小説セレクション2(中央公論新社)
「眼の壁」新潮文庫(新潮社)
「眼の壁」カッパ・ベルス(光文社)

作品紹介

物語は、《パクリ》という手形詐欺からはじまる。三千万円を詐取された会社の会計課長が自殺し、信頼されていた部下がその事件の奥を追跡する。

学生時代の友人の新聞記者の力を借りるが、主人公の「探偵」は普通の会社員である。探索は東京から中央アルプスにまで及ぶ。何度も壁に突きあたりながら、少しずつ真相に迫っていく。事件の背後には、黒幕として右翼のボスや代議士などが隠れていた。やがて巨大な組織悪がばかれ、犯人の人間性までが浮き彫りにされる。

日常性や動機が重視され、社会的な視点が取りいれられていた。「眼の壁」は「点と線」とともに、推理小説に、いわゆる「社会派」という新分野を切りひらいた記念碑的作品である。これらの作品により、清張文学は大きく押しひろげられた。手に入れた推理小説的手法を使って、清張は以後、社会小説や現代史・古代史の研究へと進出する。

(学芸担当 中川 里志)

目次

- デザイナーから作家へ
インタビュ― 西島伊三雄…………… 2
- 企画展「点と線」…………… 4
- 展示品紹介…………… 5
- 探検！清張記念館…………… 5
- みんなの広場…………… 6
- お知らせ…………… 7
- 北九州文学マップ…………… 7
- トピックス…………… 8

インタビュー 清張を語る

「デザイナーから作家へ」

山笠やどんたくなど博多の祭りや懐かしい昔の子どもの遊びを描いた絵でおなじみの西島伊三雄さんは、グラフィックデザイナーの草分け的存在。

デザイナー仲間として競い合った松本清張との思い出を語っていただきました。

西島さんは松本清張のデザイナー時代にお付き合いがあったとお聞きしていますので、清張さんとの思い出や当時の商業美術の状況をお話いただければと思います。清張さんによると昭和十四年に小倉、福岡、熊本、長崎などの図案家が集まって「九州商業美術協会」が結成されたとなっています。

それは「九州図案家協会」のことでしょうか。「商業美術」というのは確か戦後にできた言葉じゃなかろうでしょうか。私が図案屋さんにはデザインの弟子に行ったのが昭和十三年ですから、ちょうどその頃ですよ。協会のメンバーに入れてもらうたら一流になれたような気がしましたからね。確か私は昭和十五、六年頃推薦されて、一番若造のくせに入れて戴いたと思います。

昔の図案屋というのは、現在のグラフィックデザイナーというような仕事ではありませんでしたね。ポスターの版下屋さんや印刷の下絵を描く人はおろしやったようですが、ポスターなどを専門に描く「図案屋さん」というのは、あんまり居らっしゃれんやっただすねえ。

清張さんと初めてお会いになられたのはいつの頃ですか。またどういってお付き合いをされていましたか？

それがもう戦前の話ですけん、大分忘れとりますが、たしか嶋井オフセット印刷という会社で会ったような気がしますし、戦後じやったようにも思うたりします。ただ私が朝日新聞の広告会社に入ったのが昭和十

七年ですから、松本さんが朝日新聞社に入られた頃とちょうど一緒なんですよ。その頃は、博多で広告原稿を描くでしょ。私がいろいろ描いたのを小倉の本社に送りますね。専用のバッグがあつてそれに原稿を収めてぼーんと汽車に乗せると、小倉の新聞社に届くわけですね。そしたらすぐに清張さんから「今度のは面白い。よく描いたね。」というふうな電話がかかってくる。それと展覧会で確か一緒に作品を競ったりしたこともありました。ただ不思議なことは、松本さんとその頃付き合っていた博多の人たち、先輩は干支が全部私と同じ『亥(いのしし)』ですよ。だから松本さんは私より十二歳上、一回り違うとばかり思うようになりました。それで『亥(いのしし)』というのは図案が好きなのかな、なんて思っていました。松本さんはそれよりも二歳上で、結局私より十四歳上とは知りませんでした。ということはその頃の図案の先輩の中で、松本さんが一番年上じゃったわけですね。

その当時、グラフィックデザインは、東京、大阪に次いで九州がとても盛んだったとのことですが？

それは門鉄(※)の観光ポスター募集のおかげでしよう。普通の私達の仕事はその地方だけで埋もれてしまふし。全国的な仕事はというと「観光ポスター」ですもんね。例えば『九州へ』というポスターを描くと、北海道でも日本中どの駅に行っても飾ってもらえるわけでしょうが。だから「観光ポスター」には力を入れましたねえ。



清張の描いた九州観光のポスター

観光ポスターと門鉄ということ、ひよっと気がついたんですね。清張さんは門鉄の仕事をしてごうたらから汽車の時刻表なんかをよう見でござって、それが「点と線」に繋がっていったんじゃないかと思えますね。今の人は時刻表やら見らんことになりましたが、昔はちゃんと赤で、乗り継ぎ乗り継ぎをずつと書きこみよりましたもんね。分の厚い時刻表の本に小さい字がいっぱいあつたのを、自分で結んだりしよりましたよ。

清張さんが芥川賞を受賞して上京された後もお会いになったそうですね。

ええ、そうですが、今考えると残念なこと、清張さんは偉くなられて忙しかろうからと、博多に来られたときにも私は遠慮してほとんど会いに行つたりませんでした。東京の朝日新聞におられる頃、二、三回会ったきりで、あとは全然会うとらんとですよ。

「或る『小倉日記』伝」で芥川賞をとられてから、朝日の広告図案部をやめようかどうしようか、作家になるのはちょっと怖いような気もするし、と



西島 伊三雄(にしじま いさお)

大正12年(1923)福岡市生れ。
グラフィックデザイナー。高等小学校卒業後、
図案家・豊田好夫氏に弟子入りする。
復員後、フリーデザイナーとして、
観光ポスターコンクールやデザインコンペなどで活躍。
現在、福岡文化連盟理事長、博多町人文文化連盟理事長。
福岡県教育文化功労賞、地域文化功労賞受賞のほか、
平成12年秋、勲五等双光旭日章を受章。

2000年10月25日福岡市の西島氏アトリエにて
聞き手・藤井 康栄 藤澤 隆文
構成・藤澤 隆文
写真・小野 芳美

言うて今のまま絵を描きよつても同じこと。年齢ももう四十過ぎだし、と言いながら東京での暮らしにはやっぱり不安もあったでしょうし。小倉の生活を投げ打つていくということには相当の決心がいったものと思いますよ。やつと東京に転勤された頃、訪ねましたら銀座四丁目の服部時計店近くの本屋さんに連れて行かれて、そこで「オイ、オイ、西島君、俺が文春のグラビアの二ページに載ったぜ。」とあの暑苦しい顔を見せろつちやつたら。私が「ほう、偉うならしやつたのですなあ。これからは自分で小説作つて、自分で挿絵ば描かつしやつたらどうですか。」と言いましたら、「絵というのは他人に描いてもらつた方が文章が膨らんでくる。だから他人に描いて貰うことにした。」と言つておられました。

他にはどのようなお話を？

「東京の生活で今何が一番食べたかか、奥さんに聞いてんなつせえ。」と言つたら、『アゲマキ』と言わつちやつたそうです。アゲマキというのは、あの有明海にとれるマテ貝。私も大好きですが、門司や小倉のほうでも食べごさつたのでしよう。今はあんまり見らんことになりましたねえ。あれが食べたいと言われたそうです。

それでちよつと思つたんですが、「点と線」の舞台がどうして香椎になったのかというところ、香椎には一緒に野球を見に行つたりなんかしよつたような気もしますし、香椎から和臼にかけてはズーッと濁ですもんね。あそこには、よう貝掘りに行きよりましたからね。それこそマテ貝だとかなんとか。今行つたら全く

変わつてもう想像つきませんね。「点と線」には「寂しいところ」なんて書いてありましたけれど、それで奥さんの生まれが佐賀でしよう。香椎の干潟は有明の干潟によう似たりますもんね。だから香椎にさしやつたのかな、なんていう気がしたりしますつたい。

「点と線」で一躍ベストセラー作家になりましたね。

こつやつて自分たちの知つた人がだんだん偉うならしやるのは良ごさすばつてん、小説の中に、ときどき知つた人の名前が出てくるのですつたい。それが犯罪者になったりですね。だからみんな、ちよつと心配したりしよりました。いつか西島つて名前が出たら困るなあと思つたりしたことも覚えとります。飲み屋の名前とか私たちが知つている町名やらがポツと出てきたりするけん怖かつたですねえ。あの鳥飼刑事というのも私たちの友人に「鳥飼さん」という人がおつたですもんね。ばつてん「こんどの本にはみんなが呑みに行きよつたあそこの店の名前が出とつたぞ、」やら言われたら、「あ！そんならそれ読んでもうか」と言いよりましたなあ。



では清張さんの作品はよく読まれていたわけですね？

いいえ、あんまり読んどりまつせんが、松本さんの文章は分かり易いと言いますか、あんまり難しくないとはいひました。それは、私もそうですが、やっぱり進学してないから、本を読むとき一生懸命、意味が分かるまで何遍でも読む。一生懸命内容を憶えようとするのですつたい。だから裏の裏まで考えながらよく読んでいつて、それで人に話したり書いたりするときには非常に分かり易く書いていく、というような形になつていかれたと思われます。凄いですねえ。

清張さんは東大やら京大のことまで、よくまあ学校も出らんで、しかも恋愛もあんまりしとらうしやれんと思つたの、よう分かるなあと思つたつたつたね。学識じゃ無うして身をもって体験してきてごさるから、やつぱり実力ですねえ。本当に体の中、全身に執筆する力があつたと思ひますね。だから、ああいうふうに分かり易く、誰が読んでも面白いストーリーの作品が出けたのでしようね。

とにかくまあ、松本さんがこげん偉うならしやるとは思ひませんでした。本日は貴重なお話をたくさんありがとうございました。

※ 門鏡(門司鉄道管理局) 旧日本国有鉄道の地方機関のつ。

特別企画展

「新たなる飛翔 —点と線のころ—」



「点と線」は、昭和32年(1957)2月から翌33年(1958)1月まで雑誌『旅』に連載されました。社会派推理小説の分野を開拓した作品としても有名です。今回の企画展では、「点と線」の、書かれた頃の時代背景や誕生までの経緯、その世界と特徴・影響などを紹介します。

I 「点と線」の世界

展示 東京駅ホーム模型、あさかぜ模型など



II 「点と線」の背景、その頃の日本

関連年表(S29～S32)

展示 戦後の代表的な推理小説雑誌(『新青年』・『宝石』)など

III 「点と線」誕生前夜

《架空インタビュー 清張に訊く》

展示: 清張自身の推理小説観・読書歴を述べた文章の掲載誌など

IV 新たなる飛翔 「点と線」誕生

1 「点と線」誕生

「証言《「点と線」を語る》」

展示 直筆原稿(初展示)、掲載雑誌『旅』、「点と線」関係書籍

2 <清張以後> 線作家たち

「影響」を受けた作家たち(水上勉、佐野洋、笹沢左保、三好徹、森村誠一)

日時 / 平成12年12月15日(金) ~ 平成13年3月31日(土)
会場 / 企画展示室



清張34歳のときである。文学青年の集まりにも、軍事色を強めてゆく世の中の空気からも無関係の態度をとってきた清張に、ある日とうとう召集令状が届いた。
 〈赤紙には「教育召集」と書いてあるが、当時は、その名目で戦場に持って行かれる場合が多かったので私も覚悟した。〉
 (「半生の記」という言葉のとおり、一家の大黒柱である清張が戦場へ送られるというのは、それなりの「覚悟」と、後に残る家族への配慮が必要であった。
 応召にあたり、佐賀の叔父・叔母に宛てた手紙の中には、疎開のことなどを頼む内容が書かれている。版下を描



応召時、佐賀県神埼郡に住む叔父・叔母に宛てた手紙。

くために独習したという、整った筆跡から、緊迫した想いが伝わってくるようだ。
 記念館に展示している書簡類には、他にも海外から家族に宛てて送った絵はがきや、自筆の書画が描かれた年賀状などがある。また展示していない資料の中から、清張の交友関係や、人柄を垣間見る書簡が出てきている。忙しい執筆の中にあつて、必要最小限ではあるが、書簡というコミュニケーションを大切にしている。

印象的な清張の手紙をもう一つ挙げておく。この手紙は、記念館の資料ではないが、松本清張という作家をよく表しているで紹介しておきたい。井上ひさし氏に宛てた、直木賞受賞の礼状に対する返事がそれである(※)。異例とも思える、この丁寧でわりと長い返事の中には、次のような箇所がある。
 〈一時猛烈に書いてゆくことも「大型」への「資格」の道かと思えます。書きながら自分の実際の方向が決まったり、あるいは別の脈脈を発見したりすることはあるものです。〉

デビュー後、歴史小説から推理小説まで精力的に仕事をした、清張らしいアドバースと言えよう。
 版下加工から始まった清張の書簡は、美しい墨書が読む者を唸らせる。しかし同時に、誠実で実感のこもった内容に胸打たれるのである。

※井上ひさし氏に宛てた手紙の全文は、井上氏と水上勉氏の対談「清張さん、ちやうどいい話」(『文藝春秋』一九九二年十月臨時増刊号)に紹介されている。

(学芸担当 林 暁子)

老よしとハルコの探検! 清張記念館

“B1F 喫茶「石の館」”の巻

きよし ねえ、ここに飾ってある色紙って清張が描いたものじゃない?

ハルコ ええ、社長の小野さんは清張とは家族ぐるみでおつきあいしていたんですって。
 この色紙やはがきも、そんな親交の中で贈られたものだよ。*

きよし 色紙1枚からも清張の人柄や美意識が感じられて楽しいな。

ハルコ 全集も置いてあるわよ。清張の世界にたつぷりとひたれる、まさにこの記念館にぴったりのお店ね。



◀人気の「石の館庭園」このほか軽食、弁当(要予約)なども。

きよし ところで、今度「記念館友の会」に入ったんだけど、会員には1割引の特典付きなんだって。だからこの支払いは、僕にまかせといて!

ハルコ やったあ!じゃあ私はハンバーグピラフに、石の館スペシャルコーヒーに、えーと、あ、抹茶のムースもおいしそう。きよし君は?

きよし ………水。

※ 館報第3号に掲載

店内の窓から見える小倉城の石垣が「石の館」の名前の由来。店内はギャラリー感覚で見物することもできます。清張作品に思いをめぐらせながら、おいしいお茶とお菓子を楽しむひとときはまた格別。喫茶「石の館」は地下1階です。(営業時間/10:00~18:00 TEL. 093-583-8558)

30万人記念—平成12年9月1日

(開館754日目)

開館以来2年余りで達成した30万人。その記念の来館者は観光バスツアーで訪れた塚原アサ子さん(佐世保市)でした。塚原さんは「清張さんの記念館ということで楽しみにしてきました。びっくりしましたが、光栄です。」と話していました。



「あなたの一番好きな清張映画は」

みんなの広場

「砂の器」

音楽が素晴らしく、少年時代の放浪の映像とかなさり、何度みても感動し、涙が出る。
(静岡・女)

人間として生きるということ、そしてその心をどうた作品に心打たれた。
(北九州市・女)

父子の苦しい旅の様子が印象深い。最後の演奏会のシーンもクライマックスにふさわしいと思った。
(北九州市・女)

「張込み」

プロローグの列車を乗り継ぎ乗り継ぎ佐賀につき、旅館についてからの字幕、遠いこと。出演者もみな熱演。ラストの列車のでていくところもよかった。
(佐賀・男)

「点と線」

福岡の地が登場するので、印象深くみた。
(福岡市・女)

「ゼロの焦点」

日本海の荒波、カメラの美しさ。
(大阪・男)

「鬼畜」

ラストの「父ちゃんじゃない」が耳についてます。
(福岡市・男)

集計Data (2000年11月 まで)

1位	「砂の器」	138票
2位	「張込み」	31票
3位	「点と線」	29票
4位	「天城越え」	12票
	「霧の旗」	
5位	「ゼロの焦点」	11票
7位	「波の塔」	6票
	「疑惑」	
9位	「球形の荒野」	4票
10位	「けものみち」	3票
11位	「逃走地図」「鬼畜」	2票
13位	「黒い画集」「顔」	1票
	「危険な女」(地方紙を買う女)	
	「影の車」「眼の壁」「無宿人別帳」	
	「わるいやつら」「愛のきずな」(たづなつし)	

※「霧の旗」は、松竹作品(昭和40年)と東宝作品(昭和52年)があるが、区別がつかないため一つにしている。
※「黒い画集」は、東宝でシリーズ化され3本作られているが、ここでは投票通りのタイトルにとどめた。

編集部より

清張原作の映画化作品は35本にのぼります。社会と人間を事件の中に描き込み、社会派推理小説のさきがけとなった清張作品は、映画界から歓迎され、昭和30年代だけで18の作品が映画化されました。初期の代表作「張込み」からはじまった橋本忍脚本、野村芳太郎監督のコンビは、のちに「ゼロの焦点」「霧の旗」「砂の器」(3作とも共同脚本は山田洋次)につながる作品を生み出しています。

感想に目を移すと、「砂の器」の人氣が圧倒的です。音楽と映像の相乗効果の素晴らしさ、そして動機と社会背景と運命の皮肉、清張映画の醍醐味が詰まった作品です。そのほかの作品に対する声として、人生や人間の悲しさ、愚かさを感じた、出演者の熱演(それだけ人物にリアリティがあるということ)に感心した、などがありました。

順位を見ると、上位の作品は見る機会の多いものが並んでいます。しかしそれ以外の作品にも素晴らしい作品はたくさんあります。なかなかみることの出来ない作品の上映会など、これから考えていきたいと思っています。

第4回テーマは、

「清張作品を読んで考えたこと」

読後の感想や、読んだ当時のこと。また、自分の人生に清張作品がどう影響を与えたか、何を考えさせられたかなど、みなさんの声をお待ちしています。

アンケートは館内にも置いています。お答えいただいた方の中から5名様に記念館オリジナルグッズをさしあげます。

「みんなの広場」係まで

「城内フォトコンテスト 作品募集」

撮影期間：平成13年1月1日(月)
～1月31日(水)

応募締切：2月16日(金) 必着
賞：最優秀(3万円)ほか

なお、松本清張記念館地下イベントホールで応募作品の展示会を行います。
(2月26日～3月1日、288点以上の場合は選考)

応募先・お問い合わせは
松本清張記念館まで

テーマ：21世紀壱番月祝い催事もしくは

小倉城、小倉庭園、松本清張記念館とその周辺

21世紀壱番月祝い催事

■1月1日(元旦) 9:00～16:00
「21世紀.COMCOM小倉城」 場所:小倉城天守閣前広場
■1月7日(日) 9:00～16:00
「小倉城フリーマーケット」 場所:小倉城天守閣前広場
■1月14日(日) 12:00～14:00
「小倉城おしるこ大会」 場所:小倉城天守閣前広場
■1月21日(日) 10:00～16:00
「北九州市長杯小倉城庭園カルタ大会」 場所:小倉城庭園書院棟

■1月21日(日) 9:00～16:00
「小倉城フリーマーケット」 場所:小倉城天守閣前広場
■1月21日(日) 10:00～15:00
「城内フォトコンテスト撮影会」 場所:小倉城エリア
■1月27日(土) 14:00～15:30
松本清張記念館友の会設立記念「新藤兼人講演会」 場所:小倉ガーデンホテル紫川
■1月27日(土)・28日(日) 9:00～15:00
「小倉城庭園新春茶会」 場所:小倉城庭園和室

研究誌『松本清張研究』 第2号 (予告)

お知らせ

松本清張研究奨励事業 研究企画募集中

『松本清張研究』は、全国の清張研究を志す人々に発表の場を提供し、今後の研究の推進と後継者の育成をめざして、年1回、記念館で発刊する研究誌です。平成13年3月末発刊予定の第2号の主な内容を紹介します。

□ 巻 頭

「大正時代の小倉と清張」(講演再録)
小林安司(北九州大学名誉教授)

□ 特 集 松本清張と菊池寛

座談会「松本清張と菊池寛」
井上ひさし(作家)、平岡敏夫(筑波大学名誉教授)、山田有策(東京学芸大学教授)
「形影 菊池寛と佐佐木茂索」論
片山宏行(青山学院大学教授)
「清張文学への菊池寛の影響(仮)」
藤井淑禎(立教大学教授)

□ 論 文

「黒い福音」論 飯島耕一(明治大学教授)
「或る『小倉日記』伝」論 赤塚正幸(北九州大学教授)
「清張と歴史教育、『落差』のアクチュアリティ」論
仲正昌樹(金沢大学助教授)

ほか

ジャンルを問わず、松本清張の作品や人物像を研究する活動や、松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)で、これから行おうとするものの研究企画を募集します。年齢、性別、国籍は問いません。ただし、未発表に限りません。個人または団体も可。

内 容

入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。金額は企画内容を検討して決定します。

応募規定

今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容がわかる企画書、予算書など(様式は自由。ただし日本語)を、平成13年3月31日までに応募してください。

選 考

松本清張記念館内の選考委員会により選考します。

発 表

審査終了後、審査結果を直接通知します(6月末頃)。なお、入選者には開館記念日(8月4日)に、北九州市で贈呈式を行います。

そ の 他

採用された企画は翌年の6月末までに実施成果を報告していただきます。また、成果品である研究論文、報告書等は記念館刊行の研究誌に掲載、発表することがあります。成果品にかかる著作権等諸権利は、北九州市に帰属します。



● 榎山荘跡
小倉北区・中井浜(中井北公園付近)
JR鹿児島本線「九州工大前」駅下車

戦後活躍した俳人橋本多佳子は、大正九年から昭和四年まで小倉・中原にあった西洋建築の邸宅・榎山荘に住んでいた。榎山荘は土木建築業を営む夫・豊次郎が建てたもので、当時は多くの文人や芸術家が訪れる小倉の文化サロンの存在であった。

大正十二年、この榎山荘で高濱虚子が句会を開き、杉田久女も参加する。久女との運命的な出会い。多佳子は久女から俳句のてほどきを受け、俳人としての道を歩み始めることになる。

松本清張は後に久女と多佳子それぞれをモデルに、「菊枕」と「花衣」「月光」と改題)を書いている。

その清張が初めて多佳子を見たのは、尋常高等小学校卒業後、電気会社の給仕をしていた頃。(小倉に大坂町という通りがあつて、その電車通りの角に今から思うとちよつと北欧風なモダンな建

築物があつた。それが大阪の橋本組という土建屋さんの小倉支店で、多佳子さんのご主人は社長の御曹子であり、多分支店長ではなかつたかと思う。その大坂町附近を通りかかると、多佳子さんの颯爽とした姿をときに見かけることがあつた。いちばん印象に残っているのは、真白いスーツ(もちろんロングスカートだつたらう)をきて、そのころまだ珍しかった自動車にご主人と一しょに乗りこんでいる姿だつた。(「多佳子月光」より)

清張はこの頃ただ度、榎山荘を訪れている。勤め先が製造している扇風機を配達したらしい。自転車の荷台に重い扇風機をくくりつけて、落ちぬように片手をガードにかけて、榎山荘への坂道をペダルを漕いで上がる清張少年の姿が目に見え、多佳子と久女と若き日の清張。榎山荘はそれぞれの出会いと思ひ出の場所であつた。

(藤澤 隆文)

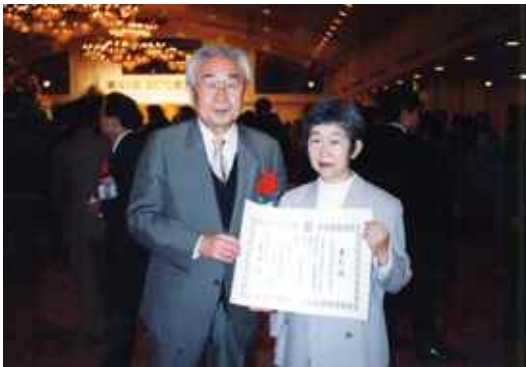
北九州文学マップ
榎山荘の出会い — 橋本多佳子

建築業協会賞(BCS賞) 受賞式 (平成12年11月16日)

今年7月、松本清張記念館は、優れた建築物に贈られる「第41回建築業協会賞(BCS賞)」を受賞しました。

この賞は、(社)建築業協会が完成後1年を経過した建築物を対象に、1959年から毎年国内の優秀な建築物に贈っているもので、事業計画、設計、施工から完成後の運営・維持管理までを総合評価し、決定するものです。今回は103件の応募の中から18件が選ばれました。当館の審査評は「常に社会と正対した物書きの視線と、ペDESTリアン(歩行者)の視点で物づくりをする設計者の視線が一致して見事。小倉城址の一隅にただよう文学的香気」というものでした。

表彰式は東京・パレスホテルで行われ、関係者一同喜びに沸きました。



設計者の宮本忠長氏(左)と藤井康栄館長(右)

● 編集後記 ●

先日行われた友の会総会後の懇親会で、遠方からいらした方など多くの方のあいさつに、清張への熱い思いと、記念館への期待が感じられ気の引き締まる思いです。これからもよろしく願います。

(大西 政寛)



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813

北九州市小倉北区内2番3号

TEL 093 (582) 2761

FAX 093 (562) 2303

http://www.kid.ne.jp/seicho

制作 (有)エディックス

- 開館時間 午前9:30～午後6:00 (入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日～12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス J R: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
バス: 小倉北警察署前/NHK前下車
車: 北九州市高速、大手町ランプより5分

松本清張記念館友の会発足 (平成12年11月22日)



総会、役員紹介の様子

今年8月から会員募集を開始した友の会の設立総会が記念館で行われました。会員数は375名(11月21日現在)、全国からたくさんの申し込みがありました。当日の総会出席者は約100名、遠くは岩手県からの参加もあり、熱気ある会となりました。

総会では役員や今年度の事業内容が決まり、幼少のころから家族ぐるみで清張と親交のあった、オーエンオー社長 小野昭治氏の講話「清張の思い出」に在りし日の清張をしのび、また懇親会では会員相互の親睦と清張氏に関する話題で賑わいました。

友の会では今後もさまざまな事業を行う予定です。皆様の友の会への参加をお待ちしています。

今後の予定

松本清張記念館友の会設立記念 新藤兼人講演会 「松本清張は何をしたのか」

- 日 時: 平成13年1月27日(土)
14:00～15:30
- 場 所: 小倉ガーデンホテル紫川
(北九州市小倉北区馬借1-1-1)
- 内 容: 脚本家、映画監督として著名で清張原作のテレビ映像化の脚本も手掛けた新藤兼人が見た清張像とは。
(とりわけ戦後史に係る清張作品から見た同人の功績を考察)



参加費/無料

- 参加方法: ハガキに「新藤兼人講演会」希望、参加者の住所、氏名、電話番号を明記し1月15日までに記念館まで応募下さい。定員は300名、多数の場合は抽選になります。

